第1部　エッセイ

テーマ「思い出のお弁当」

一般の部

木島平村長賞

重箱めぐり

井上　初美

私が小学生だった昭和三十年代後半から四十年代初め、故郷には“重箱めぐり”という風習があった。

重箱めぐりとは、四月三日の桃の節句に子どもたちが重箱に詰めたお弁当を持って、野や山に出かけるというならわしである。

私の故郷は山梨県の峡東地域と呼ばれる、ぶどうや桃などの果樹栽培が盛んな所である。この重箱めぐりは古くから峡東地域に受け継がれた伝統文化であり、子どもたちの無病息災と豊作を祈る意味があると、大人になってから知った。

地球温暖化とはほど遠い五、六十年前、正月が過ぎると故郷には厳しい寒さが訪れる。時には交通機関が全面ストップするほどの降雪に見舞われることも度々であった。そんな厳寒の冬も二月の暦をめくる頃になると、水路にはセリが生え、ネコヤナギが顔を出す。

野にも里にも春がめぐってくるこの季節に、私には心ひそかに楽しみが待っていた。四月三日のひな祭りである。

女の子のいる家では、数週間前からひな人形が飾られ、前日には一升びんに入った甘酒と重箱に詰められた料理がひな壇の前に並べられるのである。

いよいよひな祭り当日、近所の幼友だちや弟も妹も加わり、総勢十人程いただろうか。風呂敷に包んだ重箱のお弁当と四合びんの甘酒を両手に持ち、ピクニックに出かけるのが毎年の恒例であった。

目指す所は歩いて、二十分程の山のふもとである。目的地に着くと、日当りの良い場所を見つけて腰をおろし、重箱のふたを開けると誰もが「わぁー」と歓声を上げた。それぞれの重箱には、わ

が家と同じように太巻寿司や玉子焼、お煮しめやおひたし、さらに牛乳寒天など色彩(いろど)り豊かな料理が詰められていた。

　標高六百米の故郷は四月と言っても、どこか風が冷たい。けれど、重箱のお弁当は私たちの心を温めてくれるお弁当であった。